

令和 6 年 6 月 8 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02535

研究課題名（和文）ディルタイ教育学の再考 現代教育学における「科学性」とは何か

研究課題名（英文）Reconsideration of W.Dilthey's Pedagogy

研究代表者

瀬戸口 昌也（Setoguchi, Masaya）

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00263997

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ドイツの哲学者W.ディルタイ(1833-1911年)の教育学が、現代ドイツの教育科学の理論構築に対して持つ意義を考察し、ディルタイの教育学の再評価を試みる。そのために、19世紀のディルタイの教育学から、現代のドイツの教育科学の諸理論に至るまで、科学と解釈学と陶冶の関係がどのように捉えられているのかを分析した。その結果明らかになったことは、ディルタイの教育学においては3者は密接に関係づけられていたが、現代ドイツの教育科学においては、3者の関係は科学と解釈学、解釈学と陶冶、科学と陶冶というように分断され、それぞれの部分的な結びつきから、科学性が主張されているという事実である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ディルタイが、精神諸科学（教育学を含む）の哲学的基礎づけで意図していたことは、当時の自然諸科学の方法論（とりわけ実証主義）や研究成果を取り入れながら、精神諸科学の知識の普遍妥当性を、心理学と解釈学と論理学との関連で基礎づけることであった。このようにして得られた精神諸科学の知識によって、われわれは自己と世界との関係を歴史的に問い直し、新たな意味連関として追体験・追構成することが可能となる。このような意味でディルタイの科学的教育学は、「解釈学的陶冶理論」と呼ぶことができ、ポスト・ヒューマニズムの時代の教育学の新たな方向性を示唆するものである。

研究成果の概要（英文）：This study examines the significance of the pedagogy of the German philosopher W. Dilthey (1833-1911) for the construction of theories of educational science in modern Germany, and attempts to reevaluate Dilthey's pedagogy. To this end, we analyzed how the relationship between science, hermeneutics and growth is viewed in the process from Dilthey's pedagogy in the 19th century to the various theories in modern German educational science. As a result, the following facts became clear. In Dilthey's pedagogy, the three were closely related, but in modern German educational science, the relationship between the three is divided into science and hermeneutics, hermeneutics and growth, and science and growth, and the scientific nature of pedagogy is asserted from the partial connection between the three.

研究分野：教育哲学

キーワード：ディルタイ 解釈学 教育学 教育科学 教育哲学 教育思想 精神科学 理解

1. 研究開始当初の背景

ドイツの哲学者である W. デルタイ(1833-1911 年)の教育学は、教育思想史上ではこれまで以下のような評価が定説であった。

(1)デルタイの教育学は、ドイツ教育学では 1960 年代頃まで主流であった精神科学的教育学の源流であり、デルタイはこの学派の祖として位置づけられる。その理由として、精神科学的教育学の代表者であった H. ノール(1879-1960 年)と E. シュプランガー(1882-1963 年)が、ベルリン大学でデルタイに直接師事していたこと、また、デルタイが行った精神諸科学の基礎づけのための基本概念である「理解(Verstehen)」や、教育者と被教育者との「教育的関係」の分析を、精神科学的教育学が継承していることなどが挙げられる。

(2)19 世紀までドイツの教育学理論に影響力を持っていたヘルバルト教育学や、イギリスから伝わってきたスペンサーの教育論に対して、デルタイの教育学は、教育学の科学(学問)的性格の可能性とその限界について、「生の哲学」の立場から明確に論じたものとして、歴史的価値を持つ。デルタイによれば、教育学の普遍妥当性(科学性)は、彼の主張する「心的生の目的論」(人間個人の心的生活はあらかじめ目的を内在し、その完全な実現を目指して発展するという見方)に基づいている。それゆえ、教育の法則や規則は、「心的生の構造」を記述分析することにより、普遍妥当性を持った法則・規則として導出可能である。一方、教育現実は、歴史的社会的状況により常に変化する。教育改革の喫緊の課題や教育の諸問題は、国民性やその都度の教育政策にかかわる具体的で個別的なものであるから、あらゆる教育問題を解決できるような、教育学の一般的理論はあり得ない。教育の個別的で具体的な諸問題を解決するために、普遍妥当的な教育の法則・規則を、歴史的で相対的なものとして理解される教育現実にどのように適用していくのかが、教育学者と教育実践家に求められている課題である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記のようなデルタイの教育学の一般的評価を検証することによって、(1)21 世紀の現代において、教育学ははたして学問(科学)として成立するのか、(2)もし、教育学が教育科学として成立するのであれば、そのための条件は何か、を明確にすることにある。このような目的を掲げ、研究し、それを達成することは、次のような意義がある。

19 世紀後半に展開されたデルタイの教育学は、教育思想史上の単なる古典として評価されるだけでなく、教育学をも含む現代の精神諸科学(現代的表現では、人間諸科学・文化諸科学・教養諸科学・人文諸科学・社会諸科学などと呼ばれる諸学問)の科学(学問)的基礎づけにも貢献するものである。

20 世紀以降、教育学の科学的性格について自己省察を繰り返し、現在では少数に分かれて個別に独自の教育学理論を展開しているドイツ教育学に対して、教育学の科学的性格について議論する新しい論点を提供するものである。

ポスト・ヒューマンイズムの時代と呼ばれ、多様性と包括性に対する理解と、共生社会が求められる 21 世紀の教育と教育学理論の在り方について、方向性を示唆するものである。

3. 研究の方法

本研究は文献研究であり、研究のために収集した文献は大きく分けて、デルタイの哲学と教育学に関連するもの、ドイツの哲学と解釈学研究に関連するもの、現代ドイツの教育学研究に関連するもの、の 3 つに分類できる。これらの文献を、以下のような観点から分析していった。

(1)デルタイが「科学的教育学」を構想した当時のドイツの歴史的・社会的状況はいかなるものであったか。

(2)デルタイの「科学的教育学」の構想に、直接的あるいは間接的に影響を与えた人物や思想はあったか。

(3)デルタイの「科学的教育学」の構想と、デルタイのライフワークであったシュライアーマッハーの伝記的研究と、「精神諸科学の哲学的基礎づけ」は、いかなる関係として捉えられるのか。

(4)デルタイは、教育学を含む精神諸科学の科学性をどのように基礎づけようと考え、それはどの程度達成されたのか。

(5)現代ドイツの教育学の諸理論において、教育学の科学的性格について、どのような議論がなされているのか。

(6)デルタイの「科学的教育学」の構想は、精神科学的教育学を経て、現代のドイツ教育学の理論にとってどのような意義を持っているのか。

(7)デルタイの「科学的教育学」の構想は、ポスト・ヒューマンイズムと呼ばれる現代の教育と教育学理論の在り方にどのような示唆を与えているのか。

4. 研究成果

上記3.のそれぞれの観点について、以下のような研究成果を得た。

(1)ディルタイが「科学的教育学」を構想した当時(19世紀)のドイツの歴史的・社会的状況はいかなるものであったか。

ドイツ連邦の成立(1815年)から三月革命(1848年)、普墺戦争(1866年)、普仏戦争(1870-71年)を経て統一に至ったドイツ帝国(1871年)は、プロイセン国王が皇帝を、プロイセン首相が帝国宰相を兼ねていた。ドイツ帝国は議会よりも政府・軍部の力が強く、連邦制と言っても、実質はプロイセンの支配下にあった。このような政治情勢下においてドイツ国内の政治勢力は、中央党などに代表されるカトリック勢力、社会民主党に代表されるような、当時台頭してきた社会主義思想の勢力、そしてディルタイが属する教養市民層(大学教授、ギムナジウム教師、聖職者など、19世紀初頭から20世紀初頭にかけてのドイツ近代史で、政治・社会・文化の各面にわたって圧倒的な影響力を誇ったエリート層)に代表されるプロテスタント勢力の三つ巴の対立が目立つようになった。その一方で、1834年の関税同盟以後、ドイツ国内では産業革命が進み、それに伴い重化学工業や商工業が発展して、商工業者や技術者・技師などが経済力を持って新興勢力として台頭し、いわゆる経済市民層として教養市民層と対立するようになっていった。

このような社会情勢の中で、中等教育機関として教養市民層を育成する人文主義ギムナジウムと、新興の経済市民層を育成する実科ギムナジウムは、大学入学資格(アビトゥーア)の権利をめぐって、制度的にも内容的にも対立を深めていく。ディルタイはベルリン大学教授として、このギムナジウム改革にかかわり、ベルリンで開催された全国学校会議(1890年と1900年)に関与し、提言もしている。それゆえ、ディルタイの「科学的教育学」の構想は、ディルタイのライフワークであった「精神諸科学の哲学的基礎づけ」の教育学へ適用例であるとともに、当時のドイツのギムナジウム改革という実践的問題に対するディルタイ自身の見解の理論的基礎づけとなっている。

(2)ディルタイの「科学的教育学」の構想に、直接的あるいは間接的に影響を与えた人物や思想はあったか。

ディルタイの「科学的教育学」の構想の背景には、ドイツの新人文主義があり、この思想を代表する人物であるプロイセンの政治家・哲学者であったW.v.フンボルト(1767-1835年)と、プロイセンの文教官僚ジューフェルン(1775-1829年)についての著作を残している。新人文主義とは、18世紀後半のドイツに起こった「古代ギリシアやルネサンスの学芸を理想とし、人間性の全面的発展と完成を求めた文化上・文芸上・教育上の思潮」(広辞苑)を指す。ディルタイは古代ギリシアやルネサンスの学芸の重要性とその歴史的意義を認める一方で、当時の人文主義ギムナジウムで重視されていた古典語(ギリシャ語やラテン語)の教授の形式性を批判して、アビトゥーア制度の見直しを提唱している。また、「人間性の全面的発展と完成」については、次項(3)で述べる通り、ディルタイ独自の観点による教養(Bildung)論を展開した。

これらの事実から、ディルタイはベルリン大学教授という教養市民層の立場から、フンボルトやジューフェルンに代現される新人文主義的陶冶理想と向き合い、教育学の理論的および実践的課題として、プロイセンの国民教育の改善策を模索し、その成果を表面的には「穏健主義」的態度で提案しようとしたことが明らかになる。ディルタイをそこまで動機づけたのは、盟友ヨルク伯(1835-1897年)とのプロイセン教育改革をめぐる対話であり、ディルタイがそのための根拠としたのが、シュライアーマッハーの伝記的研究と「精神諸科学の哲学的基礎づけ」だったと言える。

(3)ディルタイの「科学的教育学」の構想と、ディルタイのライフワークであったシュライアーマッハーの伝記的研究と、「精神諸科学の哲学的基礎づけ」はいかなる関係として捉えられるのか。

ディルタイが複数の大学で教育学の歴史と体系について講義した時期は、記録によれば1876-1894年の長期にわたる。ディルタイは1860年に「シュライアーマッハー基金」の懸賞論文に当選し、シュライアーマッハーの書簡集の編集にかかわって以来、博士論文および教授資格論文(1864年)でシュライアーマッハーの倫理学とその批判的研究を行い、その後も彼はシュライアーマッハー研究を継続して、その成果を『シュライアーマッハー伝』第1巻の刊行(1870年)に結実させる。ディルタイはさらにその第2巻の執筆を続けるが、その準備作業が終わる前に、「シュライアーマッハーの体系を叙述し批判するには、あらゆる所で哲学の究極問題についての解明が前提される」ということを自覚して、この解明のために『精神科学序説』の執筆に取り組むことを決めて、『シュライアーマッハー伝』第2巻の刊行は後にまわした。この『精神科学序説』によって、ディルタイは「精神諸科学の哲学的基礎づけ」を、歴史的・体系的に研究しようとしたのである。ところがこの『精神科学序説』も、第1巻の刊行(1883年)以降、ディルタイはその第2巻の構想と執筆を続けながらも、それが完結することはなかった。ディルタイは『精神科学序説』の第2巻に関して、自身の教育学体系はシュライアーマッハー研究と同様に、「個々の精神科学を扱う際の実例」であり、「予備研究」として位置づけられる、とヨルクに書簡で告げている。

以上のことからディルタイは、歴史的人物(シュライアーマッハー)の伝記的研究から、精神

諸科学の知識の普遍妥当性の問題を解決する必要性を感じて『精神科学序説』に着手し、個々の精神諸科学（教育学、詩学、倫理学など）の研究に進んでいったのである。

(4)ディルタイは、教育学を含む精神諸科学の科学性をどのように基礎づけようと考え、それはどの程度達成されたのか。

ディルタイの『精神科学序説』の第2巻は、完結するには至らなかったが、ディルタイが晩年まで取り組んだ第2巻に関する著作や草稿群から、ディルタイによる精神諸科学の知識の普遍妥当性（科学性）の基礎づけは、次のように展開したと考えられる。

ヨーロッパの近世までの哲学を歴史的に概観し、その科学性を批判的に考察する。

19世紀のヨーロッパにおいて個々の精神諸科学は、形而上学的・観念論的に基礎づけられるのではなく、経験的・認識論的に基礎づけられなければならない。この基礎づけの根底となるのは、人間の思考・感情・意志の活動の全体的で包括的な連関（「人間の全体性」）である。

人間の全体性から、いかにして精神諸科学の知識が普遍妥当的なものとして確定するのか。ディルタイがこの問題を解明するために取ったアプローチは、次の3つに整理できる。

a. 心理学的アプローチ。人間の思考と感情と意志の連関を記述分析して、その特徴（構造と発展）を明らかにする。

b. 解釈学的アプローチ。精神諸科学は自然諸科学とは異なり、人間の生の体験・表現・理解の連関に基づいて成立している。それゆえ、理解の方法論である解釈学を精神諸科学の基礎づけのプロセスの中に位置づけなければならない。

c. 知識論的アプローチ。個人の心的生活において、思考が生活経験上の意識から、論理と形式を持っていかに展開され、客観的知識として確定されるに至るのかを発生的に記述分析する。

ディルタイは上記a,b,cの3つのアプローチについて、それぞれ研究を進めて行き、その成果を著作や講義や遺稿の中に数多く残しているが、これらを総括するような結論（『精神科学序説』第2巻の刊行）には至らなかった。それぞれのアプローチは、現在のディルタイ研究の課題として残されているが、重要なことは、ディルタイにとって精神諸科学の科学性は、3つのアプローチが相互に密接に関連して初めて保証されると考えられていたということである。

(5)現代ドイツの教育学の諸理論において、教育学の科学的性格について、どのような議論がなされているのか。

現代ドイツの教育学の諸理論は、1990年代以降多様化と多元化が進展し、さまざまな流派に分かれ、独自の主張をしている状況にある（例えば次の著作を参照。Heinz-Hermann Krüger, *Erziehung- und Bildungswissenschaft als Wissenschaftsdisziplin*, 2019.）このような状況を、ディルタイ研究との関連で見通すために、報告者は陶冶と科学と解釈学との関係性に注目して分析した。

ドイツの教育学理論は、ドイツ独自の陶冶概念に基づいて形成されてきた。陶冶概念の研究とその理解は、19世紀までは哲学と人間学と文学による基礎づけ（「人間とは何か」という問いに対する応答）が主流であったが、20世紀になると自然諸科学の発展の影響を受けて、経験的・実証的研究との関連づけが問題となった（哲学期間学）。さらに20世紀後半に、フランスを中心とするポスト構造主義の哲学の影響を受けた結果、陶冶は、その主体が人間性の完全な発達を目指すという従来の見方よりも、陶冶主体が自己と世界との関係を見直す「反省的な自己確認」（「私（たち）とは何か」という問いに対する応答）であるという見方が強調されるようになった（歴史的人間学）。陶冶概念の理解のこのような転換は、それに基づく教育学理論の形成にも影響を与えることになった。この転換は、陶冶と解釈学と科学との関係から見れば、教育学の科学性を、解釈を経験的・実証的に基礎づけようとする傾向と、解釈を哲学的に基礎づけようとする2傾向に区分できる。詳述すると、以下の通りである。

教育学の科学性は、理解の方法論としての解釈学によって基礎づけられる。この立場は、社会学の方法論的立場である「客観的解釈学」（エファーマン）を教育学に適用したヴェアネットの教育学などに代表される。また、「教育科学的伝記研究」も実証性を重視するという立場から、この傾向を持つものと言える。この傾向では、解釈のための手続き（プロトコルの作成や解釈の手順など）が重視され、その厳密化によって、理解の形式性や論理性が強調される。

教育学の科学性は、理解の哲学的反省によって基礎づけられる。ハイデガーやガダマーによる理解の哲学的考察は、理解と人間存在との密接な関わりを明らかにした。解釈の対象と解釈者との間で展開される理解の循環作用（解釈学的循環）によって、理解の「真理」は歴史的に権威づけられ、解釈者の先入観の修正を可能とする。理解が対象把握から自己理解へと進むことによって、自己の先入観が意識化され、新たな自己理解（自己像の変容）に達する。この点において、理解は陶冶として特徴づけられるのである。このような立場は、ケレンツの「批判的・操作的教育学」に代表される。この傾向では、理解が解釈者に及ぼす心理的影響が強調される。

(6)ディルタイの「科学的教育学」の構想は、精神科学的教育学を経て、現代のドイツ教育学の理論にとってどのような意義を持っているのか。

上記(5)で示した通り、現代ドイツ教育学の諸理論は、科学と解釈学と陶冶との関係に着目して分析すれば、理解の形式性と論理性を重視する傾向と、理解の心理的影響を重視する傾向の両極端の間に位置づけられる。しかし理解は本来、これら2つの傾向をあわせ持つものであり、

両者は密接に関連しているはずであって、切り離すことはできない。ディルタイは、教育学を含む「精神諸科学の哲学的基礎づけ」の研究を進めていく過程で、理解のこの2つの傾向を、精神諸科学に特有の体験・表現・理解の連関の中で、発生的に記述分析しようと試みたのである。換言すれば、ディルタイにとって科学と解釈学と陶冶は密接に結びついており、教育学の科学性は、理解の論理的側面（解釈学）と心理的側面（心理学）の両面から基礎づけられなければならない、そのための「知識の理論」（解釈学的論理学）が必要とされる。ディルタイのこのような構想は、論理性と実証性を重視する傾向と、哲学的反省を重視する傾向との間を揺れ動いている現代ドイツ教育学の理論構築に対する批判となり、その解決のための独自の方向性を示すものである。ディルタイの「科学的教育学」の現代的意義は、ここにある。その構想は未完に終わったが、教育学の単なる古典ではなく、現代の教育学理論の科学性を批判するだけの独自性と革新性を持っているのである。

しかし、ディルタイの「科学的教育学」の意図と構想は、ディルタイの弟子たちが展開した精神科学的教育学十分に継承されることはなかった。その理由として、以下の点が挙げられる。

ディルタイの（教育学を含む）「精神諸科学の哲学的基礎づけ」の構想は未完であり、精神科学的教育学の代表者たちは、自己の教育学理論を補完する形でディルタイの思想をそれぞれ独自に採用した。

ディルタイの「知識の理論」の全体像が公けになったのは、ドイツ語版ディルタイ全集第24巻の刊行（2004年）によってであり、20世紀前半の精神科学的教育学の代表者たちが知る機会はほとんどなかった。

「知識の理論」は、心的生の連関（人間の衝動と欲求、思考・感情・意志の連関）に基づいて、「意識の事実」の「覚知」から論証的思考が言語として代現されていく過程を発生的に記述分析する試みであった。しかし心的生の連関の純粋な記述を優先すれば理論構築は困難となり、逆に理論構築を優先すれば、記述は一定の仮説に従わざるをえないという二律背反に陥る。

(7)ディルタイの「科学的教育学」の構想は、ポスト・ヒューマニズムの時代と呼ばれる現代の教育と教育学理論の在り方にどのような示唆を与えているのか。

ドイツでは教育と陶冶は密接に結びつき、教育学の理論として発展してきた。19世紀までは新人文主義の影響下で、人間性を特徴づける理念 理性、自由と責任、平等、自律と成熟などが陶冶の理想とされ、教育の目標とされた。そしてそのような教育を科学（学問）として基礎づける役割を担ったのが、哲学と人間学であった。

20世紀になって自然諸科学が急速に発展すると、自然諸科学の方法論とその成果は、哲学と人間学にも影響を及ぼすようになり、哲学と人間学に基づく陶冶理想と教育目標に対しても疑念の目が向けられるようになった。この疑念は、20世紀後半のポスト構造主義の影響により決定的となった。

21世紀になると陶冶と教育に対して、人間性の完全で調和的な発達を疑問視し、それを問い直し、自己と世界との関係を社会や文化や歴史の文脈の中で多様に解釈し、討議し、批判し続けていくことが求められるようになった。このような時代の変化が、ポスト・ヒューマニズムの時代の陶冶と教育の背景となっている。

ディルタイの「科学的教育学」は、19世紀という時代の歴史的制約から見れば、当時の教養市民層に属する哲学者が、新人文主義的な陶冶観に基づいて提唱した国家主義的教育論である、という見方もできる。しかしそれは、表面的な評価にすぎない。ディルタイが真に意図していたことは、当時の自然諸科学の方法論（とりわけ実証主義）や研究成果を取り入れながら、精神諸科学の知識の普遍妥当性を、心理学と解釈学と論理学との関連で基礎づけることであった。このようにして得られた精神諸科学の知識によって、われわれは自己と世界との関係を歴史的に問い直し、新たな意味連関として追体験・追構成することが可能となる。このような意味でディルタイの科学的教育学は、「解釈学的陶冶理論」と呼ぶことができ、ポスト・ヒューマニズムの時代の教育学の新たな方向性を示唆するものである。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 瀬戸口昌也	4. 巻 34
2. 論文標題 ディルタイにおける生の哲学の解釈学的陶冶理論について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本ディルタイ協会『ディルタイ研究』	6. 最初と最後の頁 64-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 瀬戸口昌也	4. 巻 72
2. 論文標題 教育学と解釈学 ディルタイから現代に至るドイツ教育学と解釈学との関係について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 「大阪教育大学紀要」総合教育科学編	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 瀬戸口昌也	4. 巻 34
2. 論文標題 ディルタイにおける生の哲学の解釈学的陶冶理論について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本ディルタイ協会『ディルタイ研究』	6. 最初と最後の頁 64-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瀬戸口昌也	4. 巻 72
2. 論文標題 教育学と解釈学	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 「大阪教育大学紀要」（総合教育科学）	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 瀬戸口昌也	4. 巻 71
2. 論文標題 教育学における「科学性(Wissenschaftlichkeit)とは何か—ディルタイの体系的教育学の現代的意義について—	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要(総合教育科学)	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 瀬戸口昌也	4. 巻 20
2. 論文標題 ドイツ教育学理論に対する客観的解釈学の意義について 客観的解釈学の教育学理論への適用の問題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪教育大学学校教育教員養成課程学校教育コース教育学分野『教育学研究論集』	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 瀬戸口昌也	4. 巻 70
2. 論文標題 ディルタイの教育学と19世紀ドイツのギムナジウム改革 ディルタイとヨルクの往復書簡を手がかりにして	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 「大阪教育大学紀要」総合教育科学編	6. 最初と最後の頁 75-90
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 瀬戸口昌也	4. 巻 19
2. 論文標題 現代ドイツ教育学の「科学性」についての一考察 20世紀の「精神科学的教育学」の観点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪教育大学学校教育教員養成課程学校教育コース教育学分野『教育学研究論集』	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 瀬戸口昌也
2. 発表標題 教育学と解釈学 教育学の基礎づけの学としての解釈学の課題
3. 学会等名 教育哲学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 瀬戸口昌也
2. 発表標題 教育学と解釈学 教育学の基礎づけの学としての解釈学の課題
3. 学会等名 ディルタイ・サークル（研究会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 瀬戸口昌也
2. 発表標題 教育改革論者としてのディルタイ ディルタイヨルクの往復書簡を手がかりにして
3. 学会等名 ディルタイ・サークル（研究会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 瀬戸口昌也
2. 発表標題 ディルタイの教育学体系の構想と哲学的陶冶理論について
3. 学会等名 ディルタイ・サークル（研究会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 瀬戸口昌也
2. 発表標題 ディルタイの教育学と 19 世紀ドイツのギムナジウム改革 ディルタイとヨルクの往復書簡を手がかりにして
3. 学会等名 教育哲学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 瀬戸口昌也
2. 発表標題 ディルタイにおける生の哲学の解釈学的陶冶理論について
3. 学会等名 日本ディルタイ協会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 瀬戸口昌也（共訳）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 1492
3. 書名 ヴィルヘルム・ディルタイ全集、第11巻 日記・書簡集	

1. 著者名 瀬戸口昌也（共著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 1500
3. 書名 ヴィルヘルム・ディルタイ全集、別巻 ディルタイ研究・資料（2024年12月出版予定）	

1. 著者名 瀬戸口昌也（共著）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 ドイツ哲学入門（ディルタイの章）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関